

# 環境を通して行う幼児教育の方法

## —環境構成としての指導・援助—

田口 鉄久<sup>1</sup>

### 要旨

幼児教育の指導・援助の方法として、環境を構成することの重要性について、事例を通して検討を加えた。取り上げた 10 事例のすべてに「場」、「もの」、「人」が関与していた。魅力的な「場」があること、子どもの遊びや体験を豊かにする「もの」があること、その遊びや体験を支える「人」・・・仲間、保育者、地域の人がいることが必要であった。

事例を読み取る中で、学びの姿勢をつくる、遊びを楽しくする、子どもの育ちを促すなど 7 項目の環境構成が大切であるとした。また、現代の課題として、地域の環境を活用する、新たな体験を促す、保育の情報を発信する環境構成の重要性を指摘した。

キーワード 子どもを取り巻く環境、環境構成、指導・援助

### 1. 研究の背景

#### 1.1. 環境を通して行う教育とは

幼稚園教育の基本として幼稚園教育要領（2017）の総則で「幼児教育は」「幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものである」<sup>1)</sup>と述べる。同様に幼保連携型認定こども園教育・保育要領（2017）の総則でも「乳幼児期全体を通して、その特性および保護者や地域の実態を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とし」<sup>2)</sup>と述べる。また、保育所保育指針（2017）の総則でも（保育所の役割として）「保育所における環境を通して、養護及び教育を一体的に行うことを特性としている」<sup>3)</sup>とする。

この「環境を通して」の意味を、幼稚園教育要領解説（2018）では「幼児が生活を通して身近なあらゆる環境からの刺激を受け止め、自分から興味をもって環境に主体的に関わりながら、様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わうという体験を重ねていくことが重視されなければならない」<sup>4)</sup>と解説している。また、幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説（2018）では「乳幼児期は心身の発達が著しく、環境からの影響を大きく受ける時期である。したがって、この時期にどのような環境の下で生活し、その環境にどのように関わったか、将来にわたる発達や人間としての生き方に重要な意味を持つ」としている<sup>5)</sup>。さらに、保育所保育指針解説（2018）では「子どもは、身近な人やものなどあらゆる環境からの刺激を受け、経験の中で様々なことを感じたり、新たな気づきを得たりする。そして、充実感や満足感を味わうことで、好奇心や自分から関わろうとする意欲をもってより主体的に環境と関わることになる」<sup>6)</sup>と解説する。

このように考えると幼児教育でいう「環境」とは子どもを取り巻くすべての「もの・人・出来事・自然・社会・・・」となる。子どもはその「環境」と主体的に関わりながら、学

---

<sup>1</sup> こども教育学部こども教育学科こども教育学専攻

び・成長する。

子どもを取り巻く環境は多様である。小櫃（おびつ/2021）は環境を自然環境と社会環境に分けて考える。自然環境は生物的・自然と非生物的・自然に分ける。一方社会環境は人的環境、物的環境、情報環境、文化的環境と区分する<sup>7)</sup>。

筆者は幼児教育経験をもとに、右図のように人、施設・遊具、時間・空間・安全、家庭・地域・社会、自然と考えてきた（図1）。小櫃の言う情報環境は近年特に影響を持つものであることを考えると、重要な家庭・地域・社会環境の一つと考える必要がある。

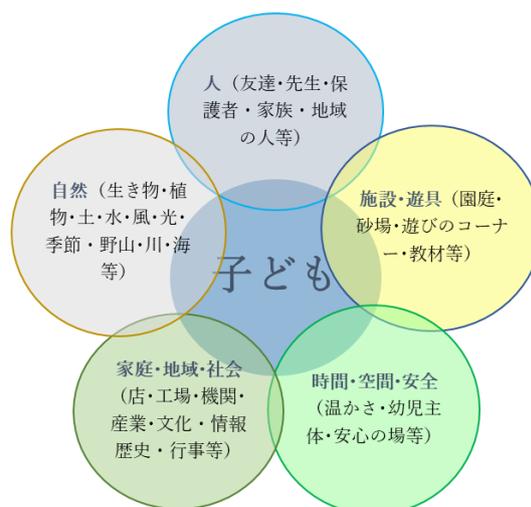


図1 子どもを取り巻く環境（田口）

### 1.2. 環境を通して行う教育の重要性

環境と関わることは「体験すること」を意味する。柴崎（2011）は『体験の豊かさの重要性』の項で「子どもたちは体験したことを言葉によって表現して概念化します。その時に物事を幅広く見たり聞いたり触れたりすることにより、その体験は広く深い身体的記憶として刻み込まれていくこととなります。その刻み方の豊かさが、小学校以降の学習場面で生きてくるのです」と、体験の豊かさが思考力の基礎を培うことを強調する。さらに、体験の豊かさは、体験の「広がり」と「深まり」の2面から考える必要があるとする。「体験の広がりを保障するには、様々な環境との出会いが必要になるでしょう」と述べ、体験の深まりについては「十分な時間と、一緒に考えてくれるような仲間や友だちの存在が必要となります」とする。ここでも時間としての環境、人としての環境の必要性を述べる<sup>8)</sup>。

河合（2017）は「“主体的・対話的で深い学び”から見た幼児期の教育」の論説で「幼児は周囲の環境に思うがままに多様な仕方に関わり、周囲の環境に様々な意味を発見し、様々なかわり方を発見する。これらの発見を幼児は、思考を巡らし、想像力を発揮すると共に、諸感覚を働かせるなど自分の体を使って行っていく」<sup>9)</sup>と述べる。

このように「環境を通して行う教育」は、幼稚園教育が一貫して大切にしてきた体験を重視する教育の方法・内容であり、後の学びの基礎になっていることが分かる。

### 1.3. 「環境を通して行う教育」と「遊びを通しての教育」との関係性

「環境を通して行う教育」と同様に幼児教育の特徴として行われてきたのが「遊びを通しての教育」である。幼稚園教育要領では「幼児教育の基本」の項で「幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習である（後略）」<sup>10)</sup>と述べるように、子どもは環境と関わり、遊びを通して学ぶと考えられている。この「遊びを通しての教育」が基本とされるのは幼児期の発達特性を踏まえているからである。つまり環境と関わって行う「遊び体験」を通して身をもって様々な学びを行うことを重視するからである。

小学校学習指導要領（2017）でも「小学校入学当初においては、幼児期において自発的

な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと<sup>11)</sup>と述べるように、とりわけ小学校教育のスタート時点において「就学前教育・保育では遊びを通して育まれた」子どもの実態を受けとめて小学校教育を行うべきであると指摘する。小学校低学年においては幼児教育の中心となっている体験を通した学びを重視する考え方が求められる。

#### 1.4. 環境を構成することについて

子どもが環境との関わりを通して豊かな学びを得るといっているのであれば、幼児教育において保育者は子どもに適切な環境を準備する必要がある。幼児教育ではそのことを「環境を構成する」という。

幼児教育の方法として環境構成の重要性が指摘される。子どもたちにとって魅力ある環境があれば、自らその環境に引き寄せられていき、遊びを通して多様な学びを得る。保育者には子どもにとって魅力的で豊かな学びが提供される環境を構成する力が求められる。保育者は子ども理解のうえに立って、“今、子どもたちが求める環境は何か”考え、構成することに注力しなければならない。

保育の方法として環境構成を重視する考え方は従来からあり、坂本（1976）は「倉橋想三その人と思想」で倉橋想三（1882～1955）の著書「就学前の教育」（1931）を論説し「周到な教育者は、まず、環境（場所と物）とを（ママ）予め支配することによって幼児を、自発性を失わせないで、意のままに動かすことができる<sup>12)</sup>と述べる。今の幼児教育観としては若干問題視されそうな表記ではあるが、倉橋の「誘導保育論」を評価しての紹介である。この誘導保育の考え方は環境を通して行う教育につながる考え方でもある。子どもが意欲的に関わる魅力的な環境を構成することが保育指導において重要になることは早くから意識されていたのである。

#### 1.5. 保育指導・援助の方法としての環境構成

幼児教育においては保育の指導・援助は多様に考えることができる。子どもの育ちの実態は一人一人異なり、多くの場合個別の支援が中心になる。筆者（2013）は保育の指導・援助には①共に遊ぶ、②環境を構成する、③提案する、④認める・承認する、⑤禁止・注意・理解させる、⑥見守る、などがあると考え<sup>13)</sup>。

保育者は子どもにとって魅力ある環境、豊かな学びを提供する環境を構成し、子どもを遊びや活動へ誘う。そこで子どもは主体的に、仲間と共に生き生きと遊び、活動する。環境構成は指導・援助の中では、直接的ではない、いわば隠れた指導・援助と言える。子どもは保育者によって意図的に準備された環境に、自らの意思で主体的に関わっていくことになる。

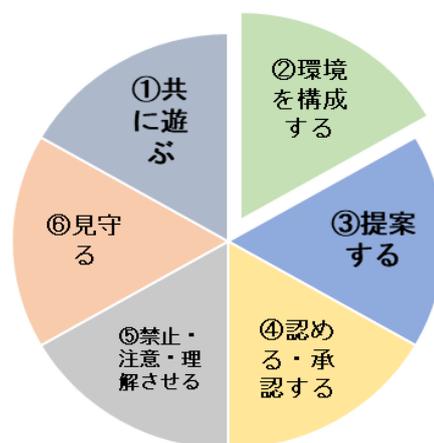


図2 保育の指導・援助方法（田口）

## 2. 研究の方法

### 2.1. 研究の位置づけ

園における子どもの生活、遊び、活動はすべて環境との関わりで行われる。その振り返りも同様に環境との関わりの視点で行われる。本研究は保育記録に表れた子どもが環境と関わる様子、保育者の環境構成の姿を「環境を通して行う教育」の視点で考察し、子どもにとって魅力的な環境構成のあり方を明らかにし、保育指導・援助のあり方を探るものである。

### 2.2. 研究の方法

実践研修会や園内研修会へ助言者として参加し、検討を行った事例、園で観察の機会を得て記録した事例、園の保育に参加して得られた事例を保育者等の環境構成に視点をあてて考察する。

### 2.3. 倫理的配慮

掲載事例（写真を含む）については研究資料として、子ども、園、保育者等特定されない形で使用させていただくことの事前了承を（口頭、電話、メールで）得た。事例 1・2・6 は実践者本人に、3・4・5・7・8・9・10 は園長に研究使用の了承を得た。

## 3. 研究の結果

### 3.1. 学びの姿勢をつくる環境構成

【事例1】 「水は箱に勝つでえ」 9月 5歳児 T幼稚園

T, Mは空き箱を水に浮かべ、箱の行方を見守る。

T:「やっぱあかんわ」

保育者:「なんで浮かないのかなあ」 T, M:「わからん」(中略)

M:「これ(お菓子のツルツルした空き箱)は絶対に浮くのに・・・(沈む)」

片付けの時、T, M「(沈んだ箱は)握ったら固まるで一」と集め、固める。

翌日 Mは箱のふたをテープで貼ると浮くことに驚いたが、しばらくするとやはり水が染みてしまうことが分かり、がっかりした。

M:「水は箱に勝つでえ」 保育者:「Mちゃんすごいね、いろんなこと試したもんね」

(カリキュラム委員会)

#### 【考察1】

保育者は水遊びを子どもと楽しむつもりでタライとプラスチック容器や牛乳パックを横半分に切った船に見立てることのできる水に強い素材を準備した。TとMは別のところから菓子の空き箱を探ってきて舟にしたが、うまく浮かばせることができなかった。同じような箱なのに・・・と不思議に思う様子が伺える。舟にして遊ぶことができずに“失敗”したのであったが、この過程を通して様々な試みをすると共に「水は箱に勝つ」という結果を導き出した。このMの姿は、真理を追究する学び手の姿である。仮説・実験・結果・考察と研究のプロセスを「遊びの中で」実現している。保育者は、安易に答えを出すことなく、子どもと物との関わりを見つめた。学びの姿勢をつくる保育者の環境構成であった。

### 3.2. 遊びを楽しくする環境構成

【事例2】 「手裏剣を売る店を始めようとする」 6月 5歳児 M幼稚園

A「手裏剣屋さんしたい」 保育者：「それいいね、楽しみだね」

当初別の店を開きたいと考えていたBと二人で机を準備し、Aが作った4個の手裏剣を机の上に並べ、  
“1”もう一方（ちび手裏剣）に“100000”と書いた値札を置いた。

A「年中組、呼んできていい？」 保育者「いいよ、でもたんぼぼ組（年中組）の先生に聞いてね」 「みんなの分あるかなあ・・・」

A「何人おるか聞いてくるわ」 A：「19人来るんやて！」 B：「えーっ！たりへんやん、4個しかないで」

A：「やばい」 C：「私も手伝うわ」（C、保育者も手伝って作る） A：「1、2、3、4、・・・24、24あるよ！  
これでいいな」 B：「これで足りる！」

（カリキュラム委員会）

#### 【考察2】

折り紙の手裏剣は複雑に組み合わせるため難しい。この手裏剣ができるのは年長児の自慢でもある。店を開いて4歳児を招待しようとしたが、数が不足していることに気づき、慌てて準備する様子が表れている。作ったものを使って店を開こうとできる環境、折り方を教え合う仲間がいる環境、店を訪れてくれる4歳児の環境、これらの環境が楽しい保育をつくっているとと言える。

### 3.3. 子どもの育ちを促す環境構成

【事例3】 「いまのきもちはしょんぼりです」 12月 5歳児 N幼稚園

帰りの集まりの様子。自分の思いを皆に分かるように伝えるようになってほしいと願って保育者は“気持ちカード”を準備している。伝えやすいように「いまのきもちは〇〇です。なぜかというと〇〇だからです」とパターンを示している。

T児は“るんるん”の“気持ちカード”を手にして皆の前で話す。T「いまのきもちはるんるんです。なぜかというたらキューとつみきでドラゴンを作ったからです」 Q「だれとドラゴンをつくりましたか」  
T「ひとりで」 Q「ラキューはじぶんでつくった？」 T「もらった」

K児は“しょんぼり”の「気持ちカード」を手にして皆の前で話す。K「いまのきもちはしょんぼりです。なぜかというとおとしあな（遊び）のつづきができなかったからです。」

Q「なんでできなかったですか」 A「じかんがなかったからです」

（観察）

#### 【考察3】

皆の前で自分の思いを語るができるようになってほしいという保育者の願いで「きもちカード」を準備した。表面は嬉しい顔、泣いている顔、怒っている顔などが何種類か準備されていた。いずれも裏面には上記のような発話パターンが書かれている。子どもは親しい相手には自分の思いを語るができるだけでも、多くの人の前で筋道立てた話をするには十分にできるわけではない。小学校への就学を考えると、皆の前で発言のできる子どもを育てるためにはこのような取組の必要性があることに気付いた。子どもの育ちを促す環境構成である。

### 3.4. 子どもの発想を生かす環境構成

【事例4】 『4月の誕生会』 4月 5歳児 K幼稚園

S男が家から四角のスポンジを2つ重ね、1か所だけガムテープでつなぎ合わせて目を描き、耳を付け「ネコの人形作ったよー」と、持ってきた。

子どもたちは興味を持ち、スポンジに画用紙や折り紙で作った耳や顔のパーツを作り、それぞれがネコの指人形を作った。

5～6人の子どもたちが、自分たちで作ったネコの指人形を使って「ねえねえ一緒に遊ぼー。」「いいわよー。」「私、ちょっと買い物行ってくるわねー。」「うん。行ってらっしゃーい。」などと、やり取りをしながら遊ぶ姿が見られた。そこで保育者は「Nちゃんのお誕生日会で、ネコちゃんを使って劇のプレゼントをしてみるのはどう?」と、聞いてみた。子どもたちが「やりたーい!絶対やりたい!」「僕もしてみよかなあ」と集まった。

(共同研究)

#### 【考察4】

S男が家でネコのスポンジ人形を作って持ってきた。保育者はS男の作ったネコの人形に興味をもったクラスの子どもの姿を見て、スポンジ等の材料、用具を準備した。皆(少人数クラス)でネコの人形劇遊びがはじまった。誕生日のお楽しみとして、人形劇を演じることを提案し、皆で取組むことになった。ここでは保育者(人的環境)が子どもの発想を活かした環境構成をする姿が表れている。

### 3.5. 子どもの主体性を育む環境構成

【実践5】 「にんじゃごっこ」 9月 5歳児 Y幼稚園

4人が腰を低くして足早に園庭を移動する。K(隊長、レッド)「ここを掘れ」仲間は手にしていたスコップで地面を掘ろうとするが、硬くて掘れない。K「よし砂場へ行こう」

K「宝があったぞー」M(イエロー)「あっ、ほんとだ、宝だ」K「宝があったらここへ入れよう」

遠くから「K男くん、チャボの世話しないの～」と呼びかけるOの声聞いて、K「(当番だったことに気づき)M子さん、隊長」と言ってチャボの世話に走っていった。

隊長になったM(ムラサキ)は「瞬間移動でワケワケで、敵を探しに行くぞ!」二手に分かれ裏庭へ行った。合流すると3人は「巻物」を取り出し、M「敵はこっちだ」と相談を始めた。

(観察)

#### 【考察5】

保育者によって行われる環境構成はその場に保育者がいなくてもあらかじめ構成した環境そのものが子どもを“指導・援助”する役割を果たす。菓子が入っていた筒状の容器に紙を巻き付けて宝の場所を描いた“巻物”を作ったことによって、忍者ごっこが始まった。

忍者組織には隊長がいるが、K隊長は事情があって抜けるときには次のM隊長(女兒)を指名して役割交代をしている。急遽隊長になったMは見事にその役割を果たす。このような子どもの姿は日頃の園での遊びでは無論、保育全般において子どもの主体性を大切にしている保育者の姿(人的環境)があるからこそ見ることのできた遊びであった。

### 3.6. 子ども自ら構成する環境

【事例6】 「シートで囲ったおうち」 1月 4歳児 S幼稚園

男女9名と保育者が園庭の太鼓橋の下でおうちごっこをして遊ぶ。準備したマットに上がり、くつろいだり太鼓橋に登って遊んだりした。保育者はこの遊びがどのように展開すると楽しくなるだろうか・・・

上を見て考えていると、同じように見上げたAが「屋根作りたいなあ」と言った。

保育者「それいいね、何でつくといいかな」と言うと、気がついたようで、A「青いシートにしたら？まえ年長さんがしてたみたいに」と言う。B「それがいいな」と言う。

倉庫からブルーシートを運んでかけることになった。たたんだシートを数人で運び、太鼓橋にかぶせた。

バーベキューをすることになった。お母さん（保育者）は子どもたちの「高級な肉買ってきて」「かぼちゃも」「キャベツも」の声を聞きながら、買い物に出た。そこに外国につながるCがやってきた。誘ったが入りにくそうだったので、「今から晩御飯の買い物に行くの、一緒に行く？」と誘い、出かけた。

（カリキュラム委員会）

#### 【考察6】

子どもは囲われた空間で過ごすことによって安定感をもつ。太鼓橋の下にマットを敷いたところでも“家”の雰囲気を楽しむことができるが、屋根がシートで覆われれば完璧な“家”になる。子どもも保育者も同じ思いを持った時、子ども自らが環境を構成する行動に出ることができた。これは日頃から子どもが主体となる環境構成ができる体制を作っているからである。環境は再構成を重ねながら子どもにとって意味のある場になっていく。

### 3.7. 保育者による手作りの環境構成

【事例7】 「ダンボールの家に入って遊ぶ」 7月 1歳児 Mこども園

ダンボールに布を張って補強した大きな家に入り、牛乳パックを組み合わせてつくった小さなベッドにS児が横になる。小さな布団をおなかに乗せて眠るふり。

その様子を見たA児も向かいのベッドで横になる。キティちゃんの人形を抱いたり、横に置いたりして一緒に寝ようとする。起きて人形を寝かせ「ねーんね、ねーんね」と体を揺らしてトントンする。隣のS児にも手を伸ばしてトントンするので、S児は「キャッキヤ、キャッキヤ」うれしそうに声を上げる。

（1週間後A児はT児と同じところで遊び）ダンボールハウスの屋根にままとの布団を4枚干し、うれしそうに手を叩く。2人とも満足げ。 （観察）

#### 【考察7】

大型の家電製品などが入っていたと思われる段ボール箱に布切れを貼り付けて補強した段ボールハウスが保育室に置かれていた。内部の左右両端には新聞紙を詰め込んで型崩れしないようにした牛乳パックを何本も重ねて整えた“ベッド”が置いてあった。寝室をイメージして遊ぶ姿がある。保育者が多忙な保育の合間をぬって作った“手作りの環境”には温か味があって、子どものお気に入りの場所となっている。手作りの空間が子どもを遊びに誘う。

### 3.8. 地域の環境を活用する

【事例8】 「水は重いわ〜」……水の圧力を実感する 6月 4・5歳児 M保育所

狭い山道を一列になって登ると、山の裾を巻くように用水が流れている。幅は60～70センチ、深さは50センチ程度だが流れは比較的早い。長靴をはいて横の道を歩いていたが、用水の中へ何人かの子どもが入ってしまった。保育者と指導員（自然学校スタッフ）はその行為を容認した。

次々に子どもは用水へ入り、流れに合わせて歩き始める。長靴より深いところもあり、勢いもあるため長靴は水浸しになる。気持ちよさそうな様子に誘われてほぼ全員が用水の中を歩いた。カニを見つけ

る子ども、流れる葉っぱをつかむ子ども、しゃがんで腰まで水につかる子ども・・・楽しそうな様子だった。(保育参加)

【考察 8】

地域には様々な資源がある。保育者は地域を知り、保育内容にすることができる資源を、子どもにつなげる工夫をすることによって、豊かな体験を通して学びを得ることになる。この場面では、子どもは水の流れの意外な重さを実感している。用水の中に住む生き物にも関心をもった。環境はそこにあるだけでは、子どもに働きかけてこない場合がある。良い環境を見つけ(準備し)子どもと結び付けてやるためにも、地域の環境に目を向けて検討する必要がある。

### 3.9. 新たな体験を促す環境構成

【事例 9】 「裸足で入ると指先の間にめっちゃ入る」 10月 4・5歳児 K保育所

泥遊びのできる田んぼがあった。はじめは指導員と共に、靴をはいたまま泥の感覚を味わい、泥の中へ沈み込むことを楽しんでた。靴が泥の中に残り、足だけ抜けることもあった。そのうち、皆が裸足になった。「一番気持ちがいいな〜」「スライムになった」「冷たい」「深〜い」「あしなくなった〜」と楽しい言葉が聞こえた。

Fは、泥の中で転ぶが、にこにこして、そのことも楽しそうで、何度か転んで、ズボンも泥だらけになっていた。Rは遠巻きに見ているが、楽しそうな雰囲気誘われて、裸足になった。「裸足で入ると指先の間にめっちゃ入る」と話した。

Kは、十分遊んだ後栗林へ行きたくなくて、泥から上がったが、泥の靴を履くことに抵抗があったり、手の汚れが気になったりして、どうすればよいのかわからず、落ち着かない様子だった。後に水を準備してもらったときは、早速手や足、靴も洗うことができ、落ち着きを取り戻した。

Tはオケラを2匹見つけ手に持った。手の中を動く感触を楽しんだ。その後放して土の中に潜る様子を指導員と共に見ていた。(保育参加)

【考察 9】

子どもの育ちを促すための環境と関わる体験は園内でも十分に行われているが、地域にはさらに多くの変化に富んだ環境がある。園庭の土や砂場の砂とは異なる田んぼの泥の感触を味わうことは、子どもの心の開放にもつながる感覚的な喜びの体験である。地域の方の理解があり、園にも地域と共に歩む姿勢があれば、子どもに新たな体験を促す環境は限りなく広がる。そのためにも保育者は地域を知り、地域の人々とつながる努力をすることが求められる。

### 3.10. 保育の情報を発信する環境構成

【事例 10】 「楽しかった思い出を記録し、共有する」 6月 M保育所

M 保育所では子どもが野外で楽しい体験をした様子を、皆が見ることのできるように壁面に貼りだしてあった。

写真と少しの説明、子どもの言葉が並ぶ。

園によっては、その日のうちに（子どもの午睡時に）写真をプリントアウトして、簡単な言葉を添えて貼り出し、迎えの保護者とともにその日の保育を語り合うところもあった。

#### 【考察 10】

同一町内 4 園は「ドキュメンテーション」として同じような取組を行っている。子どもは写真を眺め、楽しかった思い出を振り返り、次への期待を語る。保育者は子どもの姿を確認しながら、さらなる充実した活動へつなげたいと考える。保護者は写真や書き込みを見て、子どもの様子を把握すると共に、家族の話題にすると思われる。

幼児教育は園だけで行うものではなく、園・家庭・地域がつながり合って行うものである。“うちの園ではこんな保育をしています”と関係者に発信することによって保護者・地域に支えられる園になる。情報発信の力は保育者として発揮することが望まれる環境構成力である。

### 4. まとめと今後の課題

#### 4.1. まとめ

子どもに魅力のある環境があれば、自ら意欲的に関わっていく。子どもは目の前にある環境とのかかわりを通して学びと充実感を得る。この環境を準備すること、つまり環境を構成する力は、保育者に求められる重要な資質である。幼児教育の指導・援助の方法として、環境を構成することの重要性について、事例を通して検討を加えた。

取り上げた 10 事例のすべてに「場」、「もの」、「人」が関与していた。魅力的な「場」があること、子どもの遊びや体験を豊かにする「もの」があること、その遊びや体験を支える「人」・・・仲間、保育者、地域の人がいることが必要であった。

事例からは以下の 10 に視点をもって環境の構成に心がけることが重要であると整理した。

- ①学びの姿勢をつくる環境構成、②遊びを楽しくする環境構成、③子どもの育ちを促す環境構成、④子どもの発想を生かす環境構成、⑤子どもの主体性を育む環境構成、⑥子ども自ら構成する環境、⑦保育者による手作りの環境構成、⑧地域の環境を活用する、⑨新たな体験を促す環境構成、⑩保育の情報を発信する環境構成

これらのうち、①～⑦は主として日常の幼児教育において保育者が子どもの活動する姿を予測・期待しながら行う環境構成である。⑧～⑩は地域・家庭とつながり、豊かな保育



図 3 保育の様子の掲示 (M 保育所)

を作るための環境構成である。

#### 4.2. 今後の課題

保育内容としての環境については幼稚園教育要領、保育所保育指針を始めとして授業用各種テキストでも多様な内容を取り上げて紹介・説明をしている。その環境に子どもがどのように出会うかについては、保育指導・援助に係るところであって、保育者に委ねられている部分でもある。今回その点を明らかにしたいと考えた。環境構成の方法、視点は多様に考えることができる。今後も事例に基づいてさらに整理する必要がある。

#### 引用文献

- 1) 文部科学省「幼稚園教育要領」フレーベル館、2017、P5
- 2) 内閣府他「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」フレーベル館、2017、P4
- 3) 厚生労働省「保育所保育指針」フレーベル館、2017、P4
- 4) 文部科学省「幼稚園教育要領解説」フレーベル館、2018、P28
- 5) 内閣府他「幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説」フレーベル館、2018、P28
- 6) 厚生労働省「保育所保育指針解説」フレーベル館、2018、P15
- 7) 小櫃智子編著「環境指導法」わかば社、2021、P29
- 8) 柴崎正行他編・著「保育内容総論」ミネルヴァ書房、2011、P85～86
- 9) 河合優子「“主体的・対話的で深い学び”から見た幼児期の教育」『幼児教育じほう』全国  
国公立幼稚園・こども園長会、2017.7、P10
- 10) 前掲書「幼稚園教育要領」P5
- 11) 文部科学省「小学校学習指導要領」東洋館出版社、2018、P21
- 12) 坂本彦太郎「倉橋想三その人と思想」フレーベル館、1976、P62
- 13) 田口鉄久「遊び活動の指導方法・援助」、豊田和子『幼児教育の方法』みらい、  
2013、P35～39

#### 参考文献

- 榎沢良彦・入江礼子編著「保育内容環境」建帛社、2015  
三宅茂雄・大森雅人・爾寛明編著「保育内容環境論」ミネルヴァ書房、2015  
柴崎正行編著「演習保育内容環境」建帛社、2014  
全国国公立幼稚園・こども園長会「幼児教育じほう」2021.5

執筆者の所属と連絡先

鈴鹿大学こども教育学部      Email: t-taguchi@suzuka.ac.jp

# Approaches to Preschool Education Based on Environmental Interactions

## — Guidance and Education as Building an Environment —

Tetsuhisa TAGUCHI

### Summary:

In this paper, we propose a pedagogical approach for preschool educators that emphasizes building an environment that maximizes interactions for children. Our assessment is based on a series of ten concrete examples. These examples are organized around three themes: places, things, people. If children are allowed to play in an attractive place, if their experience is enhanced by exciting things and supported by competent people, they will have a better chance of learning and growing. Friends, preschool teachers, people of the community must take part in this effort to build a harmonious environment.

Through an analysis of these examples, we found that an improved attitude towards learning, a more enjoyable playing experience, supportive parenting are among the seven important factors for building an appropriate environment. Finally, we showed that there are issues that still need to be addressed: we need to use local resources, increase the number of new experiences and share more information about preschool education to build better learning environments.

Keywords: integrating children into their environment, building an environment, guidance/education